● 九　州

池　田　和　正

４月の熊本地震では，観測史上初めて震度７が２回記録され，熊本県内で年末までに死者178人（避難所生活や車中泊等に起因する関連死含む），負傷者2600人，住宅の全半壊４万棟を数えた。文化芸術分野においても，熊本市の熊本県立劇場がほぼ４か月間休館となり，中止や延期，会場変更を余儀なくされた催しが90件に達するなど深刻な影響が出た。そうした厳しい状況の中にあっても，人間にとって芸術とは何かを問うような動きが地元から起こったことは特筆すべき出来事だった。

県立劇場は休館中の５月上旬から，被災地の学校や公民館等にアーティストを派遣する「アートキャラバンくまもと」を始めた。音楽や演劇，ダンス，美術等の芸術を通して，心のケアの一助にしようという試みで，徳永二男（ヴァイオリン），佐渡裕（指揮），日本フィルハーモニー交響楽団の熊本出身メンバーらを招き，年末までに95回の出張演奏会やワークショップが行われた。民間でも音楽愛好家らでつくる「くまもと音楽復興支援100人委員会」が発足，こちらも学校，病院等で100か所を越えるコンサートを催した。

８月28日には，県立劇場の再開を飾る混声合唱とオーケストラのためのカンタータ「土の歌」が，山田和樹のタクトで県民270人によって披露された。県芸術文化祭オープニングとして地震前から決まっていたプログラムだったが，奇しくも曲中に地震の描写が含まれていた。〈地の下に怒りがある〉〈地震だ〉という詞を含む第５章から，〈地の上に花咲く限り　よろこんで日ごと営み　悲しみも耐えて生きよう〉と誓う第６章を経て，〈大地をほめよ　たたえよ土を〉と謳う終章に至る音楽に，出演者も多くの聴衆も涙した。ホールに集う人々の心が音楽を通して一つになり，当たり前の生活を取り戻すきっかけになったことは確かだ。

熊本県外でも被災地支援のためのチャリティーコンサートが各地で企画され，アーティストが終演後，募金箱を持って来場客に支援を呼びかける姿が見られた。震度６弱を記録した大分県由布市では，2009年に終了したゆふいん音楽祭が地元の観光関係者の企画で一夜限り復活，かつての音楽監督・河野文昭（チェロ）らが出演する室内楽公演が行われた（11月26日）。

以下，地震関連を除く九州の音楽界を概観する。

九州交響楽団（福岡市）は定期演奏会（全９回）で，音楽監督小泉和裕のタクトによるR・シュトラウス「家庭交響曲」，ニールセン「交響曲第４番〈不滅〉」をはじめ，上岡敏之のバッハ＝ウェーベルン「６声のリチェルカーレ」，広上淳一のラヴェル「ダフニスとクロエ」などの大曲・難曲を積極的に取り上げた。新規楽員の採用に伴うめざましい演奏力向上を実感できたが，全国的に注目を集めたのはアンドレア・バッティストーニが歌劇「道化師」などを振った第347回（２月６日）くらい。16年度から割安なU29会員制度を新設し，曲目を実演付きで解説する事前講座も始めたものの，集客率は年平均で64％と苦戦した。単に大曲・難曲に挑戦するというだけではなく，より時代や社会と対峙したプログラムを提供しない限り，クラシック音楽は一部の人々のものに限られるのではないだろうか。

地元の演奏家・団体では，常任指揮者・安積道也のもと2012年から歴史的奏法に基づく宗教曲公演に取り組んできた西南学院オラトリオ・アカデミー（福岡市）が，５年間の総決算となるバッハ「マタイ受難曲」（11月５，６日）を公演した。九州管楽合奏団（福岡県宗像市），響ホール室内合奏団（北九州市），OMURA室内合奏団（長崎県大村市）もそれぞれ定期演奏会のほか地元に密着した活動を展開。福岡では扇谷泰朋（ヴァイオリン），タラス・デムチシン（クラリネット），長谷川彰子（チェロ）ら九響楽員を中心とした室内楽やソロ公演が目立った。こうした楽員の活動，特に室内楽の充実した成果は本業のオーケストラ活動にも好影響を与えている。

オペラでは，iichiko総合文化センター（大分市）とびわ湖ホール，神奈川県民ホール，東京二期会などとの共同制作による「さまよえるオランダ人」（３月26日）をはじめ，日伊国交150周年を記念した北九州シティオペラの「ジャンニ・スキッキ」「カヴァレリア・ルスティカーナ」（９月22日），大分二期会「こうもり」（10月１，２日）などが催された。

各地の音楽祭は，例年に比べるとトピックは少なかったが，いくつかの新機軸や集大成となる公演が見られた。

第21回宮崎国際音楽祭（４月29日～５月15日）では，室内楽からオーケストラ，オペラまでの重厚なメインプログラムに加えて，新たに入場料500円の公演やポップスコンサートを企画，来場者は前年より3000人以上多い過去最高の２万人を突破した。ウラディーミル・アシュケナージが14年ぶりに登場し，指揮に加えて久々にピアニストとしての技量を示した。

第37回霧島国際音楽祭（７月15日～８月７日）では，地元鹿児島出身の下野竜也が８年にわたり取り組んだベートーヴェンの交響曲全曲演奏が「第８」「第９」で完結。とくに「第９」では新国立劇場合唱団が出演したことで，通常のアマチュア合唱では望み得ない純度の高いアンサンブルが聴かれた。下野は日本フィルの九州公演（２月５～17日）にも10年ぶりに登場し10都市を巡演した。

第18回別府アルゲリッチ音楽祭（５月１～26日）では，総監督マルタ・アルゲリッチ（ピアノ）とワディム・レーピン（ヴァイオリン）がベートーヴェン「クロイツェル」などを披露。前年竣工した，しいきアルゲリッチハウスでは通年での室内楽シリーズが始まった。新・福岡古楽音楽祭（10月８～10日）は「爛熟のパリ・ロココ」と題し，後期バロックから前期古典派に至る18世紀フランス音楽を特集。北九州国際音楽祭（10月16日～11月23日）では，地元出身の篠崎史紀（ヴァイオリン）ら国内主要楽団のメンバーに若手を加えたオーケストラが公演した。佐賀市三瀬村では地元の音楽愛好家らが企画する三瀬高原音楽祭（９月18～25日）が始まり，九州在住の演奏家や千住真理子（ヴァイオリン），金子三勇士（ピアノ）らのコンサートが催された。

公共ホールでは，九州の基幹ホール・アクロス福岡（福岡市）がグルベローヴァ主演のプラハ国立歌劇場「ノルマ」，ブロムシュテット指揮バンベルク響などの注目公演を招聘。コンサートや楽器体験などのイベントを集中的に催すアクロス・クラシックふぇすた（９月30～10月２日）は10回目を迎えた。iichiko総合文化センターは前述の「さまよえるオランダ人」共同制作のほか，上岡敏之が客演した九響定期を招請。アルカスSASEBO（長崎県佐世保市）では，１人の作曲家に照明をあて１年間にわたり主催公演で作品を演奏する「Mプロジェクト」がスタート，初年度は没後20年となる武満徹の室内楽から歌曲，映画音楽まで幅広く紹介した。